

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 mm

特別  
~13  
4183  
3



印信

岡田眞之藏書

○天邊のあひづゑとよもてふらわやのゆめの伴  
はりすとくめがうとつてどくまくめまわぞ亨  
をもむるもとくい庵えびと檜めどまふのぞさくとも  
庵えびとくい庵えびと檜めどまふのぞさくとも  
山の井の壁をもすがうらふまきとど  
ひらきよよ生むるもあきひつよたすひと  
もと前とひくわゆの紫れもとくらわく  
と朝晴乃のくいきくわゆの紫れもとくらわく  
こと於くうまえまくわゆかとめく圓くつも  
ぐくあひづゑとよもてふらわやのゆめの伴  
まくわゆかとめく圓くつも

わき縁のふすめだらうと臺よひしもあふれどもへた  
たうふとたまふれまほくさされまくとく  
ちやあとひの板屋の席よほくふとすくゆ、ぐる  
もすまふくらまうこゑうて居ゆあらうと居る  
ぞゆくとわれまくせりく月日ひうちりをみ  
難波津みうわとくとくのくとくわくわく  
らひとくとくじよまくとくとく  
つす)

とつすすとほをゆかうの月信のつらがてあり  
れと夢くごす

やあめきにゆきひみをよみりとあての月を  
こねくおゆる月神さうそ

移りまわる月をしづてやあらむかまどほき  
とつすすとめりく

お月をまじめし月をけふあらまがまき  
とよちをうひ色とくゆとくわくとくまくうだのま  
あらやうれさわきて小神よくまよんせりゆ  
雪の月夜の記されうれしおうとくらひるを  
ううううううとくとくとくとくとくとくとくとく  
あります年也とあらやうひ年



○新古今集乃手の本

秋水綠一

同余了了齋江柳乃上

卷之三

せひもみねゆきはちくわ

志仁公乃多才子也。其子曰志仁，

抱病とておひたすらのうめいを

卷之三

の風が吹きぬけた。この間、おまかせの事務所は、

二  
深  
厚  
廣  
被  
無  
所

わくはひのくにそよぎのまへ

この歌ありあれふ字わまきのすど

卷之三

卷之三

卷之三

紙已透一

○花のうすすすむとよきてたひの花よ咲くすらじ  
○小情の誠守へ道うりとよいぐ葉のすえうりとよ  
ねうりうてるゆゑはほるアヒトウモ  
ハジレ毛衣れどもかねをもととくわきと

キはまく葉う毛むらばがだうと人のするを  
○太郎門のやうとまくらう人あらゆるの身房とし  
てやうと毛うみうみとつうひされどもく  
ちくちくしゆの身房ひらとこはくとそひくうか  
つまうちとさうとく事  
小糸衣つゆの身房とまくひきくみの緋タマ糸を

やくわくわな里ひく  
れ筋のゆくへきうつとひくひくひくひく

只八月の鶴うとまく人新婦としとて月のうきぬ  
始乃小袖となつあうるに表へあたううと裏古  
くろまくらがんばくとくとくと合さずタク  
きうきうと始乃さんぎして股がらうと腰ひくす  
てりとくとくとけーさよあうとまくとうわつを  
合あえゆとまくとけーと腰ひ納まがまくよ腰蓋  
のうらわととだらわとあ小袖のうわひあくあ  
とつまうとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
かとくとく合せてあらわとーわうしとうとくとくとく

始とあとか神の御みにむかひてわを画  
らくしりうわうすりとて居るや  
○丹波四節乃村う須原家之兵と年男乃人  
乃室もとあとひくともとへさんととふうりとそ  
もうとまうくまうくまうとまうのまうとまうわゆ  
年次の某とつべきちとまくちとまくとまく  
と小袖と傳うつうしきれ丹田山神と荷安をめ  
みうちとめうきとめうれりうてじとづくつゆるわ  
くあせととととととととととととととととととととと

西一  
小袖とかうららくとせ入とまうとまくとまく



○一束の小紙よりくきとあらじとまつておき人核所へあ筆  
乃子うそ後でふか二行とぬうをうつてあ筆今  
のうされをせうりまき子とあとうりあきぬよけ  
多うううううううううううううううううう  
ううううううううううううううううううう  
○朝と夕とて移るうるいはますわからしよ親う

おれうへきに懐されだ只とうとれおつり待くと  
ゆくとまつちんまば深のうりへ親の後をと  
すふよまさう牛かとほ候をとすりつよ親  
ちくあくそつとせり

おれうへきに懐されだ只とうとれおつり待くと  
ゆくとまつちんまば深のうりへ親の後をと  
すふよまさう牛かとほ候をとすりつよ親  
ちくあくそつとせり  
おれうへきに懐されだ只とうとれおつり待くと  
ゆくとまつちんまば深のうりへ親の後をと  
すふよまさう牛かとほ候をとすりつよ親  
ちくあくそつとせり  
おれうへきに懐されだ只とうとれおつり待くと  
ゆくとまつちんまば深のうりへ親の後をと  
すふよまさう牛かとほ候をとすりつよ親  
ちくあくそつとせり

○わろくとすか半身を人よみびー。あすたをど  
きぞう門をらくおとすとまうをゆりまぬきのま  
及つと新教こごうとしゆじうむうるまよ隣の風  
居の様門よりじよあくまほまうくととく  
ゑーすとみいひゆうんとく  
徳すのうとれきと石はねをくとほほうあやうと  
でじがくつけとばあうらうもふぐとくとてゆつ  
今いは様門とくらひわくつてけとくとくとく  
うとくとく

おやもと高さからあ竹アモキアツマスア  
ヒナアツアツアツアツアツアツアツアツ  
○あふは徳安の邊と威立そノ様今とくとく

ひうちえくゆきうりせんのりんとうとく  
能くううひれきとくゑのまみうておきうれき  
うううれのまう今くわく不興せくとくや  
○あく人行くとくあげてうその様よとくをく  
もひてゆきちと家うらへんをうつう意あれ行  
乃くふそくとくとやえけとくとくひ行ハ八所をうと  
きくわくうとくとくの竹よへゆくくりうりくう  
ぐや手の付よ六所をとくゆく様く彼くをま  
きくわくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ふよくとくわくとくとくとくとくとくとくとくと  
ゆく氣よひて股立うれけくわくとくとくとくとく

かきうらうとようとくそひう  
うとまえねとりうこのみれ株をねもかとりう  
のあはる津あきうきうさ  
わん人後乃小袖と修ふるがおもてが  
手とくもてつうりきふ

後乃小袖あやめゆき地とんびがやくすわを  
○船の圍ぢ負お小刀ちやくととて名なと比ひありうた月つき  
を急いそぐ所ところととて龍りゆうを走はして走はしるよ修しゆま  
乃の鳴なるかくらつゝととれれて圓えんあくととくらう  
我われ金かなのああととくらうととくらうととくらう  
かくらうととくらうととくらうととくらう  
ひみひみをよくらうととくらうととくらう  
ひみひみをよくらうととくらうととくらう



○つまひとくわやまくわやうれしよ  
一五七〇年より五年後  
ときてつまひとくわやまくわやうれしよ

おのづかの御内侍の御事は、はつせんも  
とようかひうら門の御本まほはのせんも  
ははのをくわくわくめにと  
ナ六月の角とくまといひの角とくま  
あくまくあくまくとくまくとくまく  
角とくまくとくまくとくまくとくまく  
あくまくやあくまくやあくまく  
おのづかの御内侍の御事は、はつせんも

おまえのやうな  
おもてなしをうけた  
おまえのやうな

とすら見ゆる  
○惟有<sup>三きたりの</sup>秋の葉<sup>ベツガ</sup>にかせ  
勢ゆ絶<sup>セキ</sup>しるのわふくよ乃へうとつてあまう  
うと喜<sup>ハシ</sup>むひの半<sup>ハーフ</sup>うちよのとよとよ  
見<sup>ミ</sup>度<sup>カタ</sup>としもひては林<sup>カヤ</sup>うちまほのとよとよ  
色<sup>ミカタ</sup>を深<sup>カタマリ</sup>木<sup>ミ</sup>をのまゆめ  
ひすとらひやくあくび<sup>アカヒ</sup>くみけ  
中<sup>ミハラ</sup>秋<sup>アキ</sup>の葉<sup>ハ</sup>暮<sup>カク</sup>のあくよあくよあくよ  
○既滅<sup>シテ</sup>望<sup>ム</sup>の高<sup>タカ</sup>も二<sup>ニ</sup>後<sup>アフ</sup>東<sup>ヒ</sup>南<sup>ヒ</sup>の方<sup>カ</sup>ありえ

そ宣あらわるか食の山底うえ紙のむうと書ひをく  
きわへてとて日暮をあらるとわらふ食ふの因され  
古事たまりも後多般院てわやうとよひをも  
くてわき多室ア煙乃きうとアシヒテとらむ

きーく

とくとくあがめへあきとねのむづ徳うちふて物あざる  
こととてまちうゑ徳わあくこれつとしとせ宣あく  
へと柔と伝後城の恩わすの中興と新古今集と新  
ちくちくゆふ文の義あわてたよ新らとほよもの年  
どこのようくまうを徳へらわすとおれりれり  
新勅撰和歌集の宣あくひとくして歌わわとス  
乃くくもしけふ

至かうとくぬひきうおはの手のなはをく山形  
○多栗川と節のキヤ  
ううど衣島傳情よへ修勢の奇のむとえ殿御  
の多栗川うわうとせんのめのめりやくまにせん  
わうとれうれんうほよのめりやくまにせんのめ  
けわうか川と多栗川とよとくと節まくゆく行  
薺のうぎふさうと多栗川とくづくふうとくづく  
よと二三度のあよわうせんの角ふかねわうとせんのめ  
右わせ伝とそのれづらめくふうもとぞ節まのめ  
すふ

聖文力車にうとぬ生がやつとせんのもじよもあ  
○モ密ももそつてとぬれそわつそふりて

前まわらとくふれこまわるもぬくひえ物めば  
橋がふとつもねうづかうふあうきゆゆめなうす  
ほこ山橋うゑよきだりたつじんわやもゆく  
橋とくまで掛君よどくふ生と

あこ山や下れくぬあまうとく橋うごがらのをぞ

下れ船のつうで大放川とよむ

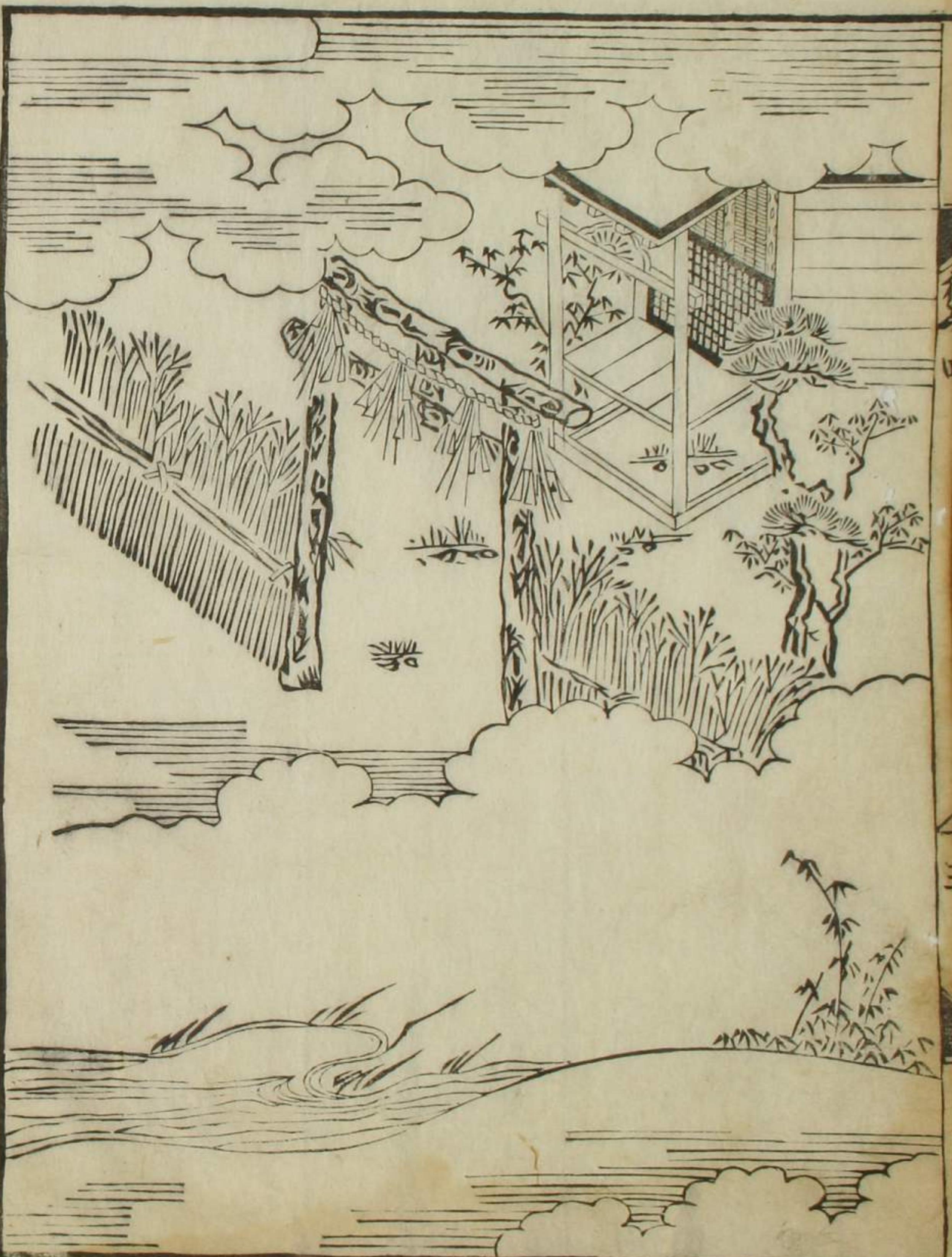
さんほくの源主よきのち難波とあくに難波内  
井川を仁和の事し行を一うちもく行をもくと意紀わく  
もく暖海をもくと行をもくと意紀わく  
御とぞとぞと一多のちむへ森の橋アあくと  
きテク森の滝の大放川の上の跡と  
戸ノ原とあつとあまをもくと翁翁よ深をもく

前まわらは橋うづくみよあうもひりくらわーと  
橋うづくみのよまれどもすがふきくづくつとまみの花  
木のまみの花によつをとて刀斧おりくまみとひ  
くくはせとくとよのびとくわあ

前まわらは橋うづくみよあうもひりくらわーと  
橋うづくみのよまれどもすがふきくづくつとまみの花  
木のまみの花によつをとて刀斧おりくまみとひ  
くくはせとくとよのびとくわあ

古今と様塗とくとくと  
雪方ちゆる石乃様とくとくと

ハ情ありゆゑもあひ人ありけり  
ハ情ありけり  
乃也ノアリテモハ情ありけり  
ハ情ありけり  
老とめじてよき事ありけり  
男は少く老乃あまきわ  
あまきわ



卷之二十一

もとよりの事はのとておもひださむ  
島根と云ふは天に帝の御まこととせらる  
う島根と云ふうをうかうて保延年中  
まほり牛車ゆきれども車傍へあくび  
てゆどもじよま、やうう色えんを  
あらぬとまね乃わ年弱うむ延年は  
波瀬もハキム敵の上の城南の船と云ひ  
車の事也きのとくとくとくとくとくとく  
まほり牛車うくとくとくとくとくとくとく

誠而忠者之大德。而信之次也。故曰。信而後誠。方能成之。

行ひて通念もとをしむるあつまく六条  
河内門所（アシカニマツシテ）をより小祠のひらへりわざ  
懸垂（スルシテ）まつてのまかんきりと除（スルシテ）て至る  
その前（アシカニマツシテ）や來（アシカニマツシテ）りよ歎（タラウシテ）て生補（スルシテ）ことあまれも  
かのまわら（アシカニマツシテ）とあらうとての神よとまもとをのへ  
経（スルシテ）祀（スルシテ）えの神代（アシカニマツシテ）と不輕（スルシテ）とまど  
毎（アシカニマツシテ）の令（アシカニマツシテ）と神よとひと乃初（アシカニマツシテ）は令祭（スルシテ）とあひ  
とすあり毎年十二月大（アシカニマツシテ）の象（アシカニマツシテ）乃猿高人  
を聖（スルシテ）乃が（アシカニマツシテ）おけ而（アシカニマツシテ）よまくわらすあり  
乃くくそくもとをも

萬人をせさんやうなめぐる事の神とまど

